



佑 啓

社会福祉法人 佑啓会 ふる里学舎
〒290-02 市原市今富1110-1
☎0436-36-7611
発行者 里見吉英
編集者 三股金利

「光と影」

スイス・スペインの障害福祉

飯田俊男

森と湖の美しいアルプスのパノ
ラマ・十七世紀の建物が華麗な文
化の軌跡を物語るスペイン・マヨ
ール広場、絵はがきで見る世界が
そのままそこにあった。

今回、日本愛護協会が企画した
海外障害福祉事情視察研修に、日
本愛護の八谷会長を団長として総
勢十九名が参加し、スイス・スベ
インの障害福祉事情に触れてき
た。十日間で各国の実情を正確に
把握するのは困難であるが感じた
ままに記してみたい。

スイスはどの家も庭がきれいに
手入れされ、暖房用の薪も数セン
チの間もなく並べられている。
洗濯物は景観を損ねるということ
で外には干さない。無駄金を嫌い
子供の自慢は、どの銀行にいくら
預金してあるかということ。これ
ならスイス銀行も栄えるはず。な
んとも国民皆A型人間といった感
じである。しかしながら表面から
は全くわからないが、全ての住宅
には核シェルターが義務づけられ
ている。たまたまシェルターのド
アが開いている所を見たが扉は二
十センチ程の厚さ。ガイドによる
とこれでも薄い方とのこと。国家
予算のかなりを軍費に当ててい
るが国民からの苦情はない。周り
をドイツ、イタリア、フランス、

オーストリアの各国に囲まれ歴史
が物語るように、侵攻の不安はあ
るにせよ、核戦争が起こった時、
最後まで生き残るのは、ここスイ
スに間違いはない。

スイスの福祉施設は、ほとんど
は民間で、その運営は国の助成、
一般の寄付、利用者の負担からな
る。特に利用者の負担は障害者も
健常者と同じで何らかのサビス
を受けるのであれば、それなりの
負担は当然といった考えで運営さ
れており、約半分は入所者の個人
負担という所もあった。年金・個
人の財産・或はそれ以外の収入が
ない人は国が助成するといったも
ので、考え方としてはある意味で
は無駄がない。

それでも運営は楽ではなく、い
かに行政から金を引き出すかで経
営者は苦労しているようである。
見学先でも帰り際に、利用者が作
品を記念にどうかと販売してくれ
た。この点のちやっかきさは日本
(と言うより当施設かな)に似て
いた。



マドリッドを首都とするスベ
イン。ここ十年で不況の影響からか
治安がかなり悪くなり観光客を狙
った事件が後を絶たない。スイス
のルツェルンからマドリッド空港
に移動中の機内でも盗難事件が発
生し空港到着時の飛行機のタラッ
プでパスポート検査。空港では、
地元ガイドから宿泊するホテルで
も誘引があり、現在警察が捜査
中との連絡。空港内も何となく薄
暗く両替をしている我々の側を何
度も行ったり来たりする不審な人
物が目立つ。移動には危険防止の
為タクシーを使うように、料金は
ぼったくられるがそういう国だと
思っただけ。それ以上のトラブ
ルに巻き込まれないためにも
そのまま支払うようにと添乗員か
ら説明がある。案の定通常の三倍
の料金を支払った時もあった。夜
も大変騒々しい。パトカー・救急
車のサイレン・車のクラクション
がひっきりなしに鳴り響く。

この国では、特殊教育センタ
ー・デイケアセンター・早期療育
センター等を視察。おかしな話だ
がどこにいても、説明してくれ
る職員が見学する内に一人・二人
増えて「いや違う。私の言う事が
正しい。」と仲間同士で言い争う
あり様。一度に三人が話始める時
もあった。さらにその内容もい
加減な所が多く、利用者は百名と
言っただかと思つた一時間後には八
十名になつてしまつたりする。そ
れでも、スペイン語のまじりたて
るような話し方は、眠気を誘わな

いから不思議である。
福祉関係で特徴的だったのは、
日本で言うところのNTTにあたる企業
が従業員と会社側の負担で、施設
を運営している所があった。この
施設は職員が家族のみが利用でき
る。定年以外で会社を辞めてしまつた
施設との繋がりがも切れてしまつた。
定員の関係で利用ができない場合
は、他施設に依頼したり、或は家
庭にヘルパーを派遣させたりする
が、その場合の費用等も会社側が
負担して、国からは何ら金銭的な
援助は受けない。日本企業もこの
点の導入を望めば、入所施設の不
足等の問題点も少しは解消される
であろう。しかしここ以外の施設
はスイス同様、全くの民間で、運
営的には厳しいらしい。施設での
日中の活動内容は日本と同じで、
企業からの受注品を扱い作業をし
たり、洗面や化粧の仕方等を教わ
る生活指導の時間があつたりす
る。早期療育センターの取り組み
もほぼ日本と同じ内容であるが壁
面が落書きだらけの住宅街の一角
にその場所が位置していたのが何
ともこの国らしかった。



る。芸術等興味はなかったが、そ
の見事さには驚かされたと同時に
こんなに、治安が悪くて良く盗ま
れないなど余分なことも考えてし
まう。また夜には本場のフラメン
コを観た。夜十一時頃から始まる
ものでクライマックスは日本とい
う午の刻。喜怒哀楽を感情のまま
に表現する踊りで、服を脱ぐこと
はない。なのにストリップに似た
エロチックな面を感じてしまつた
自分はこれ以上フラメンコについ
て語る資格はない。

海外に行った人から、いわゆる
行動障害と言われる方は目にしな
いという事を聞いていた。今回の
訪問先でも同様であつた。特に自
閉症と言われる方は少なくダウン
症の方が圧倒的に多かつた。いな
いという事はもちろんないだろう
がその人たちの行方を聞くことは
自分にはできなかったし、一行の
誰ひとりとしてその場で口に出す
人はいなかった。入所施設が多い
日本と少ない海外の違いはこのあ
たりにあると思われる。

高度経済成長でお金持ちになつ
た日本。国がお金を出して全ての
障害者を全面的にバックアップす
るという考え、これに至る背景に
はそれなりの苦悩は確かにあつた
のだろう。しかし、ノーマライゼ
ーションの理念は金では買えない
よといわんばかりの両国福祉関係
者の表情には、たくましさを感じ
させられた研修であつた。

スペインの観光として、プラド
美術館を見学。ゴア・グレコ等の
名画が二千点以上展示されてい

(指導主任)

悲願の初優勝

平井 晋也

「試合終了の時間です」球場内に響き渡ったアナウンスがどういう意味なのか、私は理解できずに茫然としていた。だが、ベンチ・スタンド・選手みんなが歡喜し抱き合っている姿を見てようやく気付いた、優勝したことを。胸上げされながら落とされても全く痛みを感じない。何人と握手をしたのかも全然憶えていない。彼等が私にくれた感動は、そんなものなど簡単に吹き飛ばしてしまった。

これは十月二十八日、二十九日に行われた、千葉県ゆあいピックソフトボール大会で優勝を決めた直後のひと幕である。優勝までの道のりは決して順調ではなかった。今年はクジ運が悪く、準々決勝は大会八連覇中の富里福葉苑と顔を合わせる。そのことは抽選の日に職員と選手に告げた。多分ほとんどの職員が、これまでかと思っていたに違いない。私も決して例外ではなかった。しかし選手達は違っていた。「どうしたら勝てるんですか」「もつと速い球投げたいよ」「バッティングマシン買つてよ」みんなが本気で勝とうと思っているのを知った時、私も考え方が変わった。諦めるには早過ぎると。



しかし、技術面では数段劣っている選手達に何を教えてあげられるだろうか。他のコーチ達とも何度も話し合った。山た結論はチームワークだった。みんなソフトボールをやっているんだと意識してもらうために、声を出し、一つのボールを追いかけて、エラーしたらフォロースタンド。少しづつではあるがボールに対する集中力が出てきたように思われた。



そして決戦の時。
試合は予想通りライバル同士の投げ合いとなった。初回二点先制したが、裏の攻撃ですぐ同点に追い付かれた。その後得点したものの、少しでも集中力が切れた時、必ずその隙を突いてこられると思っていた。しかし、その心配をよそに選手達の方が私以上に集中していた。パント対策、ベースランニングは練習通り行ってくれた。

終了の瞬間。
一願ぎであったー
あの富里福葉苑に、勝ったのである。千葉県のソフトボールの歴史を変えたのではないかと思つた。何よりもチームワークの勝利だということに価値があるように思う。そして優勝！

今大会を通じて彼等が職員に与えてくれた感動は決して忘れることはないだろう。練習の成果である優勝を自信と誇りとし、今後の生活に活かしてもらいたいと思う。

家族会

一泊研修に参加して

鍋本 靖子

九月十九日より一泊二日の研修に参加させていただきました。今回の研修は匝瑳郡野栄町にある「のさか学園」施設見学でした。今回で三回目となりましたが、回を重ねるごとに参加者が多くなっているようです。

のさか学園は、北総台地の平坦な土地に敷地面積四千八百平方メートルで、効率よく配列されたコの字型の白い建物が目に入ります。そして九十九里浜まで徒歩で十分以内と近く、寮生達の活動範囲も広く、のびのびと過ごしている様子がうかがえます。学園のみなさんの温かいお出迎えを受けて体育館へ案内され、施設長のご挨拶に引き続き二班に分かれて学園内を見学させていただきました。施設長は「僧侶」の資格をお持ちとまで、話好きで声も大きく元気でもとても分かりやすく話して頂きました。

昭和四十三年の設立ということで、かなり古い建物をイメージしていましたが、各室入口の段差をなくした工夫等が施されており、不便・不自由なところは見あたりませんでした。それもその筈、平成三年に全面的に改築され、新しい基準に添った設備になっているとのことでした。園生達の主な作業はシクラメン栽培、陶芸、マット・クッション作り等です。園内には喫茶、カラオケ等もありとてもアットホームな感じが見受けられます。

のさか学園での悩みの一つは入所者の平均年齢が四十七・五才（ふる里学舎の場合は二十四才）とかなり高いということです。親も七十才を越えている方も多く、病氣だったり或は既に亡くなっている方もいて、居宅時に家に帰れない方も多いとのこと。親のいない方には兄弟や親戚等にも連絡してなるべく家庭の雰囲気を感じあわせよう

と努力されているようですが、なかなか難しい様子です。さらに高齢化が進んだ場合を考え、障害者老人施設等の必要性を真剣に考え既に計画に入っているとのことでした。

私達ふる里学舎にお世話になっている者にとつて、今は平均年齢も若く、子供が高齢者となることはあまり身近に感じないかもしれませんが、やはりいざばん気になるのは、親がなくなつたあとのことです。代わって面倒を見てくれる人がいるだろうか。この子の将来はどうなるであろうかを考えるときやはり不安は絶えません。開所から三十年近くの歴史のある「のさか学園」の歩んできた道、そして今後の取り組みなどはおいに参考になり、勉強させていただきました。

施設見学のアとは鮎子の鳴鶴館に宿泊。夕食後の懇親会では見学した施設の話や日常の悩み事等いろいろな意見の交換があり、たいへん有意義な研修会でした。

編集後記

少年時代、寒さが身に深く沁み込むような早朝。吐く息は白く、耳を突き刺すような痛みだけが記憶に残る。

それがここ数年すっかりイメージも変わって温かい冬が定番と化している。寒がりの私にとつては喜ばしい限りだが、休感できるほどのスピードでじわじわと温度が上がっているのかと思うとさすがにぞっとする。

秋も来となり、学舎の季節となりつつある椎茸の原木が福島山奥からトレーラーに積まれ、冬の訪れを知らせるかのように運ばれてきた。

今年もあとわずか、さあ思う存分ウツデイーライフを満喫しよう。

堀口 貴宏

